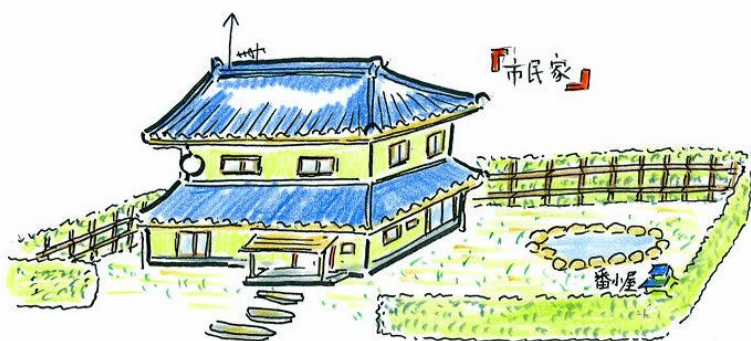


★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

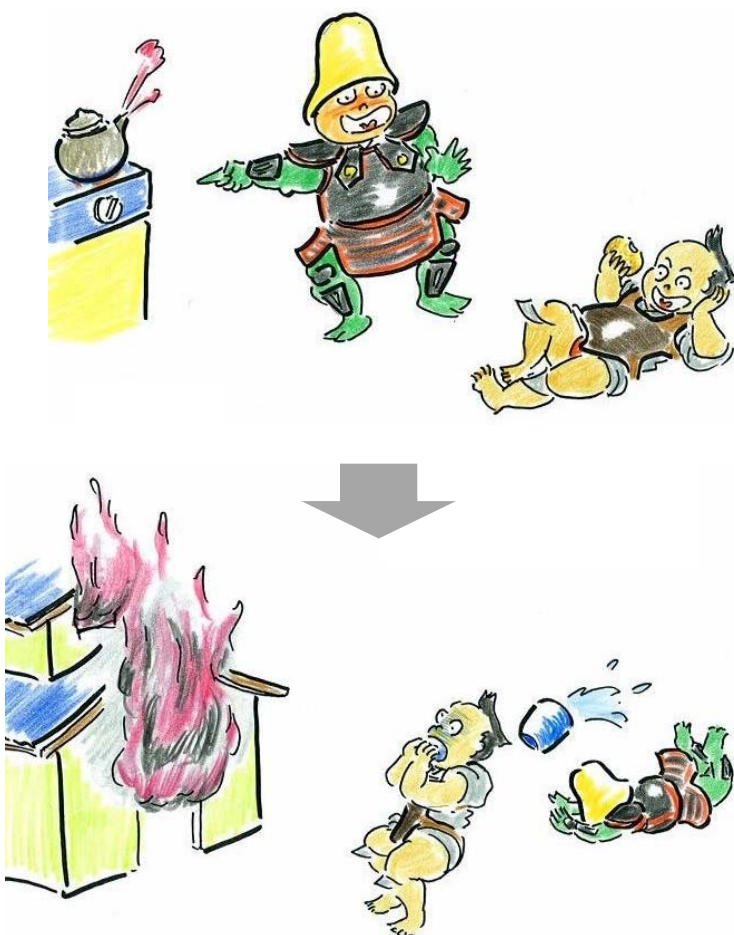
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん} 中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん} には何故か二人の姿が見えるようになったのです。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.48

「ホウ・・・オン・・・コウ・・・？芸人か何かですかい？ホンコンなら知ってやすが。・・・違う？じゃ、何ですかい？膀胱炎か何かの親戚ですかい？膀胱炎は苦しいですからなあ。ホウオンコウってやつはもっと痛いんですかね？」と真顔で聞き返すご助に



「馬鹿者、報恩講を芸人や病気にしおってからに！ご助よ、報恩講というのはな、主家様が信仰される浄土真宗の開祖『親鸞上人』の遺徳をあがめ、お礼を申す大切な法要じゃよ。」と伝えると

「し、しんらん・・・しょうにん？・・・しんらんという商いものをしている方ですかい？あっ、判りやした、金沢駅で見たことがありますあ。あれでやしよ、新種の蘭、シン蘭を売って歩いている方でやしよ？」

「愚か者！『善人なをもって往生を遂ぐ いわんや悪人をや』の親鸞様じゃ！」と拙者が言うと



「あん？歎異抄じゃねえですかい。親鸞様のお弟子の河和田の唯円様があらわしたヤツでしょ？あっ、旦那様が先からお話のホウオンコウってホンコさん、のことじゃねえんですかい？ホンコさんを知らねえ奴なんていねえでしょうが。何でえ、それならそうと言ってくれりゃあいいものを。旦那様の話はまどろこしくっていけねえや！」と言われ

「う、うむ、済まぬな。確かに親しみを込めてホンコさんとも言うわな。それでじゃ、朱蠟燭と線香と抹香は用意してあるじゃろうな？」と念のため聞いたのじゃった。

「へえ、朱蠟燭と線香と・・・マ、マツコウ・・・でしたな。ええ、用意してありますとも。」と小声になるご助に

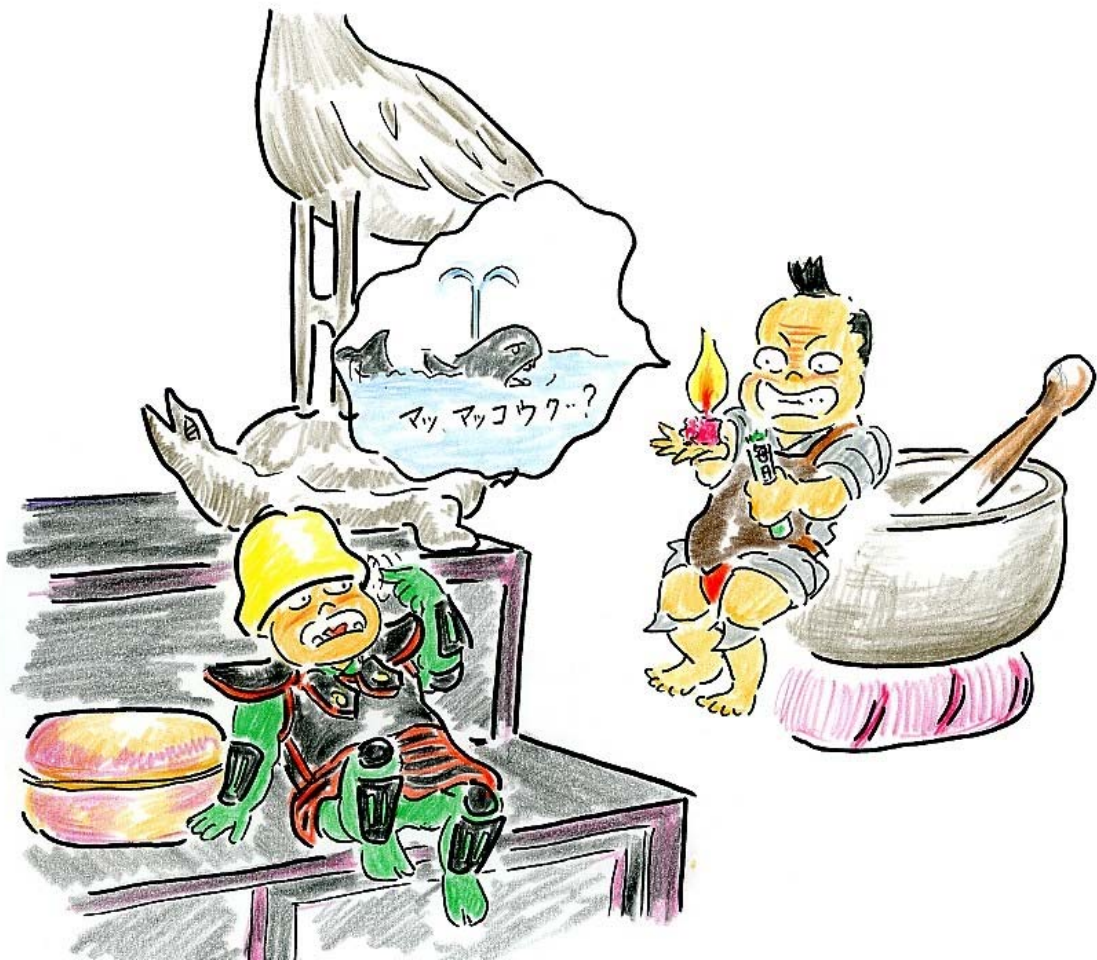
こ奴、抹香を知らんようじゃな・・・と思ったのじゃが、「確か抹香入れに去年の残りがあつたはずじゃ。」と思い出して

「ああ、用意してあるならそれで良い。」と話しを終えたのじゃった。

ところがご助はというと仏間に入ったきり

「マッコウ・・・マッコウって何じゃ？まさかマッコウクジラではないじゃろう
な？知ったかぶりをしてもた！ああ、判らん！どうしたらええかのお・・・。

神様仏様お助けを～」などと神仏に祈っておったところへ、幼稚園帰りの姫様が



「ご助、にやにしておりゅ？」と声をかけて来たのじゃった。

「あ、なんでえ姫様ですかい、縁起でもねえ。地獄にえん様（閻魔様）じゃね

えか。まあ、いいや、マッコウって知っていやすかい？」とご助が聞くと

「マッコウクジラきゃ？」と思ったとおりの答えが返ってきて、

「・・・やっぱし、マッコウクジラ・・・。仏壇に生臭のクジラ肉を・・・供え

る？」と独り言を言っておると

「ご助はバカきゃ？ ブチュダンに肉を供えたら罰があたりゅぢよ。幼稚園児の

常識じゃ！わからないにやら祈祷じゃ。」と姫様。



「き、祈祷？」

「そうじゃ。昨日の暴れん坊將軍で見たから覚えてる。一緒にしゅるじよ。」と

いうと仏壇から香炉や朱蠟燭、線香などを持ち出すと、ご助が

「さ、最近の幼稚園児は凄いいんじゃのお」と驚いているあいだに仏壇の前に祭壇を作り上げ、ご助が止める間もなく、マッチに火を点けようとしたのじゃった。

「ひ、姫様、それはダメじゃ！アウトじゃ、アウト。火遊びはいけませんぜ！」

とご助は叫んだのじゃが

「ご助、マッコウが分からないままで良いのきゃ？」と姫様に凄まれ

「ううううっ・・・今回だけですぜ！」と、言いくるめられたのじゃった。



朱蠟燭に火がともり、香炉からは折り入れられた大量の線香の紫煙がモクモク

と立ち上がり始めると、祈祷装束を身に付けた姫様は

「オンサラバ、サラバ、コンニチワ、マタアシタ・・・マッコウの意味を教え

給え、オンサラバ、サラバ、コンバンワ・・・教え給え、カァーッ！」と呪文

を唱えると、粒状のモノを護摩のように香炉に放り込んだのじゃった。

「オンサラバ・・・カァーッ！」とご助も姫様と一緒に祈祷を続けたのじゃ。



香炉から立ち上がる紫煙が白煙となり、姫とご助を包み込んでいき、朱蠟燭が

消えるころには全てが燃え尽きたのじゃった。

「ご助、マッコウが何か分かったきゃ？」と姫様に聞かれ

「あっしには全然でさ。姫様は分かったんで？」とご助が聞き返すと

「マッコウクジラ。」と答える姫に

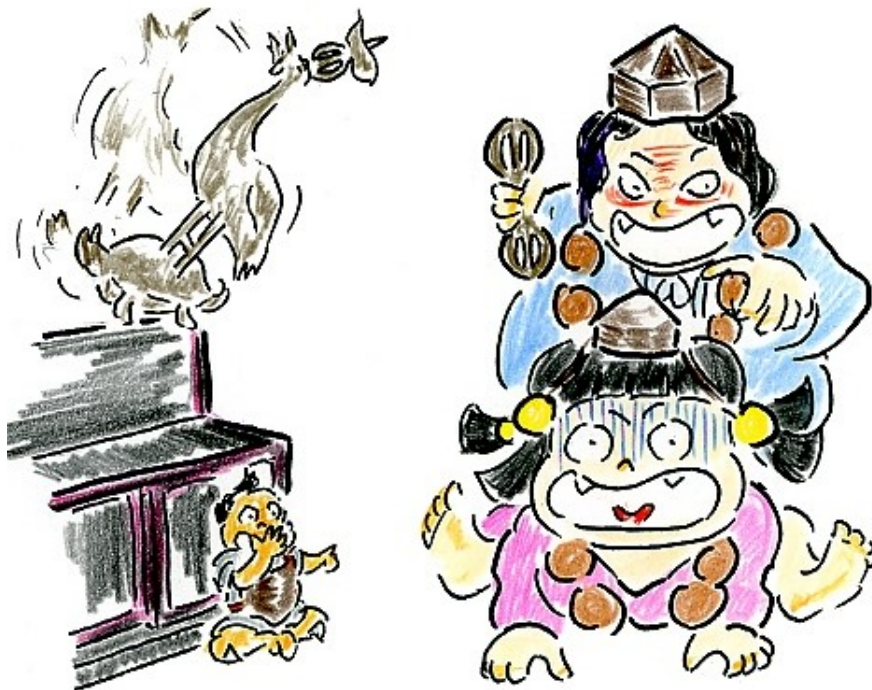
「姫様は馬鹿ですかい？仏罰が下りますぜ？」とご助が言うと

「仏罰にゃんかないの。えんちゃんの祈禱を信じなちゃい。」と姫様が言い終

える前に『パァンッ』と仏間の襖が開くと

「えーーーーんッ！何してるのッ！」と鬼のように怒ったママが入って来たの

じゃった。



「きゃーっ、ち、違うの！ママ聞いて。えんちゃん、ご助を助けようと祈祷してたによ！」と逃げ惑う姫様じゃったが、流石にそこはママのほうが上手。

「そんな嘘をついても駄目！逃がすかっ！」と姫様の襟首を

「嫌ぁー助けて！助けてご助っ！」と姫様は茶の間に引き摺られ・・・しばらくして

「きゃー、ペンペン嫌っ、ママ助けて・・・嫌ぁ」という姫様の悲鳴と

「今日という今日は許しません！ペンペン百叩きの刑よ！」というママの怒鳴り声が響いたのじゃった。

「さ、流石は姫様のママ様じゃな。はて？援様のママ様じゃからえんママ様じゃな。あはは・・・こりゃあ面白い。えんママ様というからには、やはり閻魔様より強いんじゃろうのお・・・あははは・・・」と呑気に笑っておったご助じゃったが、ひゅうううううううーと、急に生暖かい風が首筋を撫で、ゾクゾクと背筋に寒さが走り

「な、何でえ。気色悪い風だぜ。」と仏壇の方を振り返ったご助の頭上を目掛け、鶴亀の燭台が落ちてきたのじゃった。

「ひいいいっ」というご助の悲鳴は　ゴオーオン　燭台に脳天を打たれ途切
れてしまったのじゃった。



どれくらいの時間が過ぎたのじゃろう……。ご助が目を覚ますとそこは真つ
暗な闇の中、かすかに川の流れる音が聞こえるから、川原であろう……。

「こ、ここは！」と、ご助には此処がどこかという見当がついておった

「ま、また来ちまったじゃねえか・・・」と恐怖で震えるご助の声に合わせるように背後から

「ま〜た来ちまったのくうわあ〜い？」とおどろおどろしい声が・・・。

「お、お婆か？奪衣のお婆様かい？」と振り向いたご助の真ん前に

「馬鹿だね、おみやあ様は。こんな短い間に二度、三度と三途の渡しへ来るモンをあたしゃ知らないねえ。」と前歯の抜け落ちた大きな口を開け笑う奪衣婆が立って居ったのじゃった。



(令和6年12月号に続く)